

# 仲間の声は信頼の光

## スポーツのキセキ

交通事故の後遺症で左脚は動かない。ブラインドサッカーチーム「岡山デビルバスターズ」の主将・幸田怜(23)（岡山市中区）は仲間からのパスに、右脚を滑らせるように合わせ、ゴールに突き刺した。

昨年12月、岡山市北区であった初心者向けのフットサル大会。結成8か月で臨んだ初の対外試合は、7戦全敗で終わった。だが、幸田はサッカーができる喜びをかみしめた。

2013年秋。自転車通勤中、交差点で車にはねられ、高次脳機能障害で左半身麻痺などの後遺症が残った。懸命のリハビリで歩けるまで回復したが、5歳で始めたサッカーは諦めるしかなかった。

そんな時にチームの結成を

### ブラインドサッカーチーム 岡山デビルバスターズ

OKAYAMA DEVIL BUSTERS



練習に励むメンバー。ブラインドサッカーとの出会いが前に進む原動力となった(岡山市中区の県立岡山盲学校で)

知った。知的障害や視覚、聴覚、肢体に障害を抱える仲間たちとボールを追い、左脚を引きずりながらも走れるようになった。「このチームがあったから、ゴールを決めた

瞬間の喜びを、再び味わうことができた」

「ブラインドサッカーのチームを作るので、手伝ってくれないか」。昨年1月、安藤久志(44)（倉敷市福江）は、同じ会社に勤める佐藤雄一(27)（同市福井）に声を掛けた。

生まれつき強度の弱視で、中学時代に右目の光を失った安藤。日本ブラインドサッカー協会で選手育成などに携わり、日本代表チームの監督も経験し、「地元で競技を普及させたい」と思いを募らせてきた。

視覚障害者がプレーするため、ゴールの位置や進行方向などを声で指示する。「言葉を掛け合うことが、自然と信頼関係を生み、深めていく。視覚だけでなく、様々な障害

ブラインドサッカー 視覚障害者向けの5人制サッカーで、パラリンピックの正式競技。視力によってクラスが分かれ、全盲の「B1」は、キーパー以外がアイマスクを着け、鈴の入ったボールを使い、ガイドの「コーラー」が敵陣の裏からゴールの位置などを説明する。弱視の「B2」「B3」はアイマスクを着けず、フットサルと同じボールを使用する。国内の競技人口は約400人。約20チームが活動し、障害の種類を問わず、健常者も一緒にプレーするのは「岡山デビルバスターズ」だけという。

を抱える人を集め、効果を体感してもらえたら……。佐藤の姿が浮かんだ。

知的障害で思いをうまく言葉にできない佐藤は、同僚とコミュニケーションが取れず、仕事を投げ出すこともあった。「変わるかもしれない」。チームに誘うことにした。

練習は月に一度、県立岡山盲学校(岡山市中区)で行う。多い時は健常者を含めて20人近くが参加する。ボールを追う仲間を見つめ、安藤は言う。「みんなサッカーを通して、前を向いて進むようになった」

佐藤は2月、安藤らと東京マラソンに出場し、10時を疾走する予定だ。「職場でも積極性が出てきた。自信が付いてきたのかな」。安藤は目を細める。

「事故前のように、歩けるようになるのは難しい」と医師に告げられ、一時は車椅子での生活を覚悟していた幸田。右脚で懸命にグラウンドを走り、笑顔で語った。「このチームでサッカーを続けていれば、いつかは左手と左脚も動くようになる」と信じている」

(文中敬称略、三島浩樹)

、伊藤容疑者は5分頃、岡山市北-ックで、女性経-拳で殴り、止めに入った同市と山口市の男性客2人の髪をつかむなどした疑い。3人にけがはなかった。伊藤容疑者は旅行で岡山を訪れ、同店では1人で酒を飲み、酔って客に絡み始めたところを女性経営者に注意され、腹を立てたらしい。

ぼうはん日本  
http://www.bouhan-nippon.jp/  
全国読売防犯協力会